

〔編集後記〕

蠟山政道先生は本年5月15日お年84才にて逝去せられた。先生は本研究所の初代所長鶴飼信成教授のあとを受けられて1961年より、1965年、創設された大学院行政学研究科の初代科長となられるまで、本研究所所長として、大規模な調査研究プロジェクトを組織し、指導され、本研究所の充実と発展のためにも、大きな足跡をのこされた。先生の名オーガナイザーとしての御活躍ぶりは、つとに口傳されるところであったが、本研究所がその総合研究の成果を発表した出版物の数々をひもとくとき、あらためて先生の牽引力の大きさと、当時の研究所のさかんなる活動の有様が彷彿とし、先生への感謝、惜別の思いを深くせずにはおられない。当時は、主として個別的研究を掲載するための「社会科学ジャーナル」の他に、推進されていた総合研究プロジェクトの成果を報告する「社会科学研究」が英文あるいは和文で刊行され、11号を重ねている。日本語で発行されたものだけ挙げても「農村の権力構造—千葉県睦沢村調査研究」(1959)「地域社会と都市化—都下日野町調査研究」(1962)「近郊都市の変貌過程—三鷹市調査研究」(1964)で、いずれの号も社会学・経済学・政治学を専攻する10数名のファカルティの協同研究である。この他にも「首都圏の水資源開発」(1968)は東大出版会刊の単行書ともなっており、フォード財団の補助を受けた3年がかりの、三鷹市を素材とする都市計画問題と、日本の外交政策の2プロジェクトの研究成果は、「社会科学ジャーナル」第7号(1968)に部厚い報告書となっている。新任のファカルティも増えている今日、「社会科学ジャーナル」第6号(1965)の蠟山先生古稀記念論文集とともに、これらを合せ読んで、先生の私たちへの鞭撻のお声を聞きたいと思う。

今回の「社会科学ジャーナル」第19号(1)は、年2回の刊行も軌道にのり、1979年本学招聘教授であられたBierzanek先生の論文を頂き、本研究所に所属して研究されたRothacher氏、研究員和智綏子氏、助手の谷口佳子氏、大学院博士課程の太田亮君ら、新進気鋭の研究者たちの意欲的な論文を掲載できて、1ヶ月程の遅れはあるが発刊の運びとなったことを喜んでいる。

(村上記)